



もう一步、踏み込んで考えたい自然保護

佐藤 謙

理に走れば角が立つ、情に棹させば流される。いやはや、困ったものですね。開発サイドは、その開発が自然破壊にならないという理屈をしっかりとこねている。それが自然破壊につながると批判するにはかなりの理屈が必要である。でも、理屈だけでは多くの方に分かってもらえない。印象深いキャッチフレーズの方が情に訴える。土幌高原道路では「可愛いナキウサギ、そして不思議な風穴地帯を守れ」であったが、日高横断道路では「奥深い原始的自然、最後の秘境を破壊するな」となる。しかし、事業者側のパンフレットには「道のむこうに、待っているもの。主要道道静内中札内線」とある。何を言いたいかは別に、上手ですね。まさに、キャッチフレーズ合戦。

世の中には巧い広告があふれている。世の中から遅れがちな大学でさえもイメージアップの広報活動が盛んになった時代である。でも、広告品を購入して失敗する例が少くない。実態を吟味するより分かりやすさを求めて、キャッチフレーズに騙されるからだ。やはり、実態を知らなくちゃならない。そこで、「もう一步、踏み込んで考えてみたい」のである。だから、「もう一步」理屈をこねる。

「木道によって植生が守られる」として、道内の自然公園では木道設置が大流行である。しかし、雨竜沼湿原や大雪山五色ヶ原のように、「木道すべて善」ではなく「相当に悪」である例が多すぎる。また、「緑化」についてみると、身近な市街地や都市公園、そうではない自然公園や保護地域など、異なる場所でそれぞれに合う緑化が考えられる。場所によっては、緑化しないで自然な回復を待つ方が良い場合がある。郷土樹種や在来種と言いながら、地元産ではなくルーツが本州産となる場合も少なくない。このように述べると「緑化に反対するのですか」と反論される。しかし、「緑化であればすべて善」とは言えない。

盗掘によって実際の生育地から希少植物が失われる実態がある。盗掘理由となる栽培・流通・販売については「栽培は文化であり栽培権がある。栽培流通させて値段を安くすれば盗掘が止む」という理屈が自然保護を唱える人にもかなり巧く訴えるらしい。しかし、この考えが優位なまま、この10年ほどの間に盗掘は対象種を拡げ徹底されてしまった。種の保存法や各地の条例では、希少種を指定公表しながら栽培・流通・販売には無批判、現地の保護策はボランティア任せ、実際の生育地を確実に守る方策が生み出されない。

何とも困った状態。多様な環境に成立する多様な自然に対して、広告のような画一的な行為。目先の分かりやすさを乗り越え、もう一步、踏み込んで考えてみたいものである。

さとう・けん

1948年若手県生まれ。北海道大学大学院農学研究科修士課程修了。
現在、北海学園大学教授。学術博士。専門は、北海道の高山植物と
植物相、およびそれらの保護研究。北海道自然保護協会副会長